

J. C. スマッツの「ホーリズム」概念（2）

——ホリスティック教育の原点を探る——

高 橋 史 朗

1 はじめに

ジャン・クリスチャン・スマッツ（1870-1950）は、ケープタウンで生まれ育った南アフリカの政治家、哲学者、将軍で、南アフリカ戦争（1899-1902）に従軍し、1902年、英国のケープ植民地侵攻を指揮したが、不成功に終わった。1907年にトランスバールにてボーサ内閣の植民地長官になった後、南アフリカ連邦の創設（1910）に積極的な役割を果たした⁽¹⁾。その際に新憲法の主任起草者を務め、国際連盟創設では準備会議の段階から決議提案者に指名されるなどの役を演じ、1919年から1948年の間に述べ14年間にわたり同国の首相として活動、国際連合創設には、世界で唯一の国際連盟調印をも経験した全権大使として主導的な役割を果たした⁽²⁾。『ホーリズムと進化』という著書は、スマッツが1924年にハーツゾッグに敗北した直後に書かれ、ゲシュタルト療法の創始者であるフレデリック・パールズに多大な影響を与えた。彼は1934年に最初に南アフリカに行った時に同書を読み、同書にはゲシュタルト療法思想に発展する思考が大量に散見される⁽³⁾。

同書の序文によれば、スマッツがイギリスのケンブリッジ大学に留学していた頃「人格性」という主題に大変興味をもち、「ホイットマン—人格性の発達についての一研究」という小論文を書いた。同論文は刊行されなかったが、この主題に彼は関心をもち続け、次第に人格性というものは宇宙現象の特殊な状態にすぎず、自然界における総合体なのだということが判明し、1910年に未刊行の「全体性の研究」という論文を書いた。

同書は自然科学と生物学における近年の進歩に光を当て、科学と哲学との境界領域における論争の余地のある諸問題を取り扱っている「両者間の接点の書」である。近年の進歩に照らして基本的な概念を再検討すると、これまでおろそかにされてきた非常に重要な特徴をもつ要因あるいは原理があることが明らかになる、とスマッツは指摘し、その要因を「ホーリズム」と呼び、それは「宇宙の総合性の土台を成す宇宙における統一体の起源と進歩を運命づける原理」を意味する。この統一体が連続して徐々に発達し成層化したものが無生物の初期から最も高度なレベルの靈魂の創造に至る進歩に他ならない。同書はこの原理に照らして、物質、精神、人格性の基本的概念を再検討し、この新しい観点から進化の諸問題を論じている。スマッツによれば、同書は「入門的性格の書」であり、「ホーリズムとホリスティックな考え方は、科学と哲学、倫理学、芸術と同系の学問の主要な問題に関して、それらとの相対的関係が重要であることを立証するであろうと私は信じている」「本著は私自身の精神が斬新で一層満足のいく概念を求めて行脚してきた道筋を記すものである」と彼は述べている⁽⁴⁾。

同書の内容については、既に拙稿「J. C. スマッツの『ホーリズム』概念（1）—ホリスティック臨床教育学と感性—」で論述したが、本稿では第1章～第3章、第5章、第6

章，第8章を中心に紹介していきたい。

2 基本的な概念の是正

物質と生命と心はまったく異なった現象であると考えられてきたが，人間においてはこれらの三つのものは明らかに混ざり合い「人格」を構成して一体となっている。これらを説明する決定的な言葉は見つかっていない。そこで，スマッツはこの三つを結びつけ，その根底に横たわる根本的な統一性と統合性を明らかにしようと試みている。物質と生命と心に共通した基盤がなければ，個々の人間の中でそれらが統一されているということは，まったく不可思議としか言いようがない。

唯物論者も唯心論者も19世紀の科学において大きな役割を演じた原因と結果に関しての硬直した物理学の概念の影響下にあった。すなわち，結果の中にあったものは原因の中にもあったと信じられてきた。それ故に，論理的に進化論を肯定する人は唯物論者である傾向が強く，唯心論者は論理的に進化論は生命の精神的，道徳的価値すべてを傷つけるものとして否定してきた。このような「因果律についての形而上的理論」は「間違いを犯している」として，彼は次のように指摘している⁽⁵⁾。

「我々は進化論を信じる。しかし，それは一世代あるいは二世代前の機械的進化論ではなく，創造的進化論である。我々は，本当の意味での成長，過程の中でどんどん大きくなる成長というものを信じる。我々は，本質的に創世記の外にある創世記を信じる。我々にとって静的な進化，すなわち生成するのではなく，きちんと並べ換えてみると，もとのままである生成というものは存在しない。原因と結果の絶対的平等，それは当時の人々によって暗黙のうちに信じられていたドグマだったのだが，私が後で説明するように，我々はそのような考えには賛成しない。状況は変化し，物の見方は変わり，今日では思慮深い人々は，唯物論対唯心論という古くさい過去の遺物となってしまった問題に煩わされることのない，本当の確信ある進化論者である。我々は物質から生命が，そして物質と生命から心が生じてくるという系統理論を受け入れる。今日は教養ある人にとって，進化論はいわばコペルニクスの理論がそうであるように，常識，あるいは知的雰囲気の一部となってしまうている。

私がかつて述べたように，これは大変含蓄のある事実である。もし，我々が生命と心が物質から生じるものであると信じ，それらが物質から進化してきたものであり，物質が生命と心を保証し，生命と心の恐るべき潜在力となっているなら，それは，もはや唯物論者や物理学者が抱いていた古い物質というものではなくなる。唯物論者がかたくなに固守した考えを受け入れることは，結果的には，彼らが思い描いていた単純な立場を完全に覆すことを意味する。物質は神秘の扉を開く。物質は，生命あるいは心を生み出すという行為において，全く思いも寄らない形で自らを現す。それはもはやかつての物質というものではない。生命と心の神秘を蔵している物質は，もはや運動とエネルギーの乗り物という古い物質ではない。古い秩序の境界は，変わりつつあり，古い考えのまっすぐな輪郭は，曲がりつつあり，物質と生命と心の関係において我々が考えている全体的状況というものは，硬直したままであるというよりは，流動的になりつつある。問題の核心は，進化論を十分，

そして完全に受け入れことは、我々にとって基本的な概念の意味において大変な変革をもたらすに違いないということである。生命と心は、今では自然界の宇宙において、異質な要素であるというより、物質的な秩序と一致するようになり、それは全く同等なものと認められている。だから生命と心を異質なものであると再び断言するような包括的な物理的な秩序を打ち立てようとすることは、明らかに不可能となる。このねことねずみの手順は、単に論理的な混同の場合にすぎない。この出入りのゲームは、そうはいかないであろう。もしも、進化論が受け入れられて、生命と心が物理的秩序の中にあり、またそこから発展するものならば、生命と心はその秩序の中にあり、物理的な秩序を純粹に機械的なものとして、生命と心が関わりをもたず、實在の要因ではなく、論理的に排除さるべきものとして思い描き続けることは不可能である。もしも、進化論が正しく、生命と心が物質の中で、また物質から生じてくるのであれば、宇宙はもはや純粹に物理的機構であることはできず、そこから生じるシステムは、生命と心の要因のために本当の座を提供しなければならない。……物質と生命と心は持続しない、共通点のないものであるどころか、少なくとも関連のある同じ壮大な過程の進歩の一続きとして現れる。」

3 時間と空間の新たな概念

スマッツは第1章「基本的な概念の是正」で、進化論を認めることが物質の本質に関していかに必然的かつ深刻な影響を私たちの考え方に与えるかについて説明しようとした。第2章「時間と空間の新たな概念」では、「あらゆる方面で自然の流動的で創造的な過程ともっと調和する概念が求められている」として、「時間と空間の新たな概念」について、次のように要約している⁽⁶⁾。

「我々は、空間・時間の新しい概念から始めようと思う。その概念というのは、相対性理論にあっては、今でもまだ常識となっているニュートンの学説における概念に取って代わりつつあるのである。時間と空間についての新しい考え方は、より高度な数学や物理学における研究から始まり、おもに宇宙におけるすべての実際の運動が相対的なものであることと、この相対性に関して得られた数学、物理学の結論と関わりがある。このようにして数学的物理学者によれば、動いている観察者にとっては、動いている物体は、静止している観察者が観測するよりも、収縮するか、あるいは短くなったように見える。観察者あるいは物体のどちらか一方がより早く動けば動くほど、収縮の度は大きくなる。時間も同じように変化するが、変化の方向は逆になる。動いている物体の空間は、収縮するようであるが、時間は広がるようである。その結果、もしも静止している観察者によって見られた場合よりも、通過点を通過するのに時間がかかる。この時間と空間における共同的で、不可分の変化は、本来非常に重要であるだけでなく、それらどちらか一方が独立して存在するのではなく、時間と空間がいっしょになって実際の物理的世界における時空媒体を形成するという革命的な考えに直接導くことになるのである。この考え方からすれば、単に空間的なものにすぎないと考えられている物体と事物は、實在するものではなく、抽象であるということが分かる。一方、時間と空間、そして時空における作用の両方を含む事象というのは、實在するものであり、實在の単位を形作る。古い時間と空間という考え方を

やめ、時・空という考え方に置き換えることは、宇宙の広大な世界と原子の極小な世界の両方において、非常に厳密な方法によって試されてきたのであり、両方の場合において、新しい概念が申し分なく機能することが理解されてきたのである。

時間と空間の変化は、我々の住んでいる相対的な運動の世界にあっては、すべての測定の基準と時間を測れる時計は、変化するものであり、決まった結果を出すものではないという結論に導くのである。その結論を重力と宇宙の回転運動に適用する時、宇宙の時空媒体は曲がり、歪んでおり、古い考え方によれば、時間と空間によるものだとされている等質的な性格をもったものではないことがわかる。すべての重力場において、事象は曲線においておこり、時空宇宙の根本的曲線の結果としておこる。その結果は、全宇宙は限定的構造的性質を獲得し、以前に考えられていたように広がりゆく、同質的なものではないといくことを意味しているのである。新しい時空の概念に従えば、構造、すなわち限定的な組織された構造は、物理的宇宙においては必要欠くべからざる性格となり、この構造的性格こそが、今までの多くの現象についての説明を不可能にしていた原因だったのである。」

4 物質については是正された概念

スマッツによれば、化学は、物質を究極的な単位、または原子にまで、そして色々な化学的組み合わせにおいて異なった単位の配置や間隔による構造上の仕組みに従って、分子や物質という組み合わせまでたどりついた。新しい物理学は、原子の構成要素である電子と陽子、または陰陽の電気の単位に分解することによって、その分析工程を一步深めた。これらの組み合わせは、構造的には多かれ少なかれ、複雑な太陽系の形にほぼ近い、中央に陽電気を帯びた原子核とその周りを回る惑星のような電子によって構成されている。物質は時空で計り知れない速度を伴って回っているエネルギー単位の構成物となる。そして、さまざまな元素は、原子の中の諸単位の数と配列によって生ずる。⁽⁷⁾

このような物質の構造上のエネルギーに満ちた仕組みを分析することによって、物質と生命との間に横たわる溝を大幅に埋める次のような結論を導き出すことが可能となるいう。

まず第1に、物質が不活発で受動的なものであるという古い考え方は、完全になくなると思われる。生命と同じように物質は非常に活発で、技術的、物質的意味においても活動そのものである。違いは死んだような状態と活動との間にあるのではなく、2つの異なった活動の仕方にあるのである。生命と物質との共通した活動性を通して物質と生命の場は重なり合い混ざり合い、生命と物質との間に絶対的な分離は消えてしまう。

第2に、物質における放射能は、生命における有機系統に幾分似た役割を演ずる。両者は流動体に古い固定的な実体と形式を与えるが、それらの間の違いは軽視されるべきではない。有機体の系統が進歩的であるのに対して、放射能は退行的であるということは特に認められなければならない。しかし、地球の歴史において生命の若さに比べて、物質はあまりにも年をとっていることによるのかもしれない。

第3に、化学の周期表は動植物の系に非常によく似ているということである。科、種、目の概念は両者に適用されることができた。これは活動と可塑性と、おそらく発展と発生

学上の関係における性質が、有機、無機の両方の領域にあてはまることを示している。

第4に、物質の構造上の特質は物質それ自身の特性を産み出すのではなく、物質界におけるすべての価値の源となっている形式と配列と型を産み出すということを示している。生命と心はそれらがもたらす選択的組み合わせと形式を通して価値を産み出すのと同じように、物質もまた分散した拡散構造がないというのではなく、内部に秘めた活動性と力を通して構造的な組み合わせや配列に影響を与える。それは単に人間に対してだけでなく、宇宙の秩序においても価値がある。そのダイナミックな構造的、創造的特性がなければ、物質は宇宙の母たることはできなかったであろう。

第5に、原形質におけるコロイド状の物質はクロロフィルやヘモグロビンのように特性や製造物質をあらわにする。クロロフィルやヘモグロ빈は生命の働きに必要であり、物質と生命との間にはある大きな溝に橋を架ける働きをする。コロイド状態においては、我々は物質が生命の玄関口近くまできているのを見る。大変な跳躍が主な溝として残っているものを越えて起こるかもしれない。しかし、生命はおそらく我々が今日知っている最も低い形態においてよりももっと低い次元で始まったかもしれないようであるから、突然変異は結局そんなに極端なことではないのかもしれない。いかなる場合でも新しい物理学、特にコロイド化学によって明らかにされたように、物質の本質についての綿密な探求は物質を生命の概念に非常に接近させる⁽⁸⁾。

5 「全体」の概念の利点

スマッツによれば、有機体は部分から成り立っているが、その部分は単に寄せ集められたものではない。それらのまとまりは、機械的なものではなく、別の原則に基づくものである。有機体は部分の合計以上のものであり、これらの部分がこなごなに分解されると、有機体は破壊され、切り離された部分を再び寄せ集めても元通りには決してならない⁽⁹⁾。全体は部分の中に、部分は全体の中に包括され、このような全体と部分の合体は、全体の機能の特質と同様に部分の機能のホリスティックな特質に反映される。この全体という偉大な概念を哲学者も見落とし、科学者も確実に見落としてきたとして、彼は「実在の進化をたどっていく方法としての全体の概念」には、次の利点があると主張している⁽¹⁰⁾。

まず第一に、ホーリズムと全体の概念は、自然の観察された過程の写しとかなり近いものであり、ホーリズムと全体の概念を当てはめることは、主客二元論的な認識図式を乗り越えて、「自然を自然自身から、そして自然自身の基準によって説明できるようにしようとするものである。」

第二に、ホーリズムの基本的概念によって、我々は物質と生命と精神の間の深い溝に橋を架け、二律背反を解決することができる。概念としての物質と生命と精神が絶対的に分離しているということは克服され、それらが実際には重なり合っているということは、物質と生命と精神が宇宙におけるより根本的な活動の発展の諸相であると考えることによって説明される。ホーリズムの概念は、物質と生命と精神をまったく異質なものとみる概念の対立を超えて、ホーリズムがさまざまな形をとったものとして物質と生命と精神を再び一つに結晶化させる。ホーリズムは絶対主義的哲学が陥りがちな一元論ではなく、「多

元的な一元論」である。

第三に、非常に現実的な強みは、生命（life）についての曖昧で不満足な考えを、より明確な概念と取り替えることから生じる。生命の概念は曖昧すぎて定義することができず、明確な内容をはっきり示すことはできない。私は、科学的、哲学的目的のために全体の概念を生命にとって代えることは、基本的な考えにより一層の正確さを与えることになるであろうということをほのめかしているのである。

6 「全体」を創造する6段階

このようにスマッツはホーリズムの意義を説明し、全体という概念を用いることによって、生物学や生の哲学の最も扱いにくい絡み合った問題群を解きほぐす道を探ろうとしている。スマッツによれば、実在が進化する局面において「全体」を創造する段階は次の6段階に要約されるという。

- (1) 自然界の物体の中だはあるが、単なる物理的または化学的力あるいはエネルギーの活動と同じように、現在知られている内的活動をもった部分の明確な構造または総合、例えば化합的合成物におけるように。
- (2) 生物における機能的構造。生物においてはこの特別な総合における部分は、個性の維持のために積極的に協同的に働くようになり、共同で機能するようになる。例えば植物におけるように。
- (3) この特別な協同的活動は、たいてい暗黙のうちに、また無意識のうちに起こるいくつかの顕著な中央制御によって統合され、また規制されるようになる。例えば動物におけるように。
- (4) 中央制御は人格において意識的なものとなり絶頂に達する。同時にそれは社会におけるより合成的でホリスティックな集団の中に現れるようになる。
- (5) 人間社会におけるこの中央制御は、国家や同様な集団の組織において超個となる。
- (6) 最後に、人格から離れ、自由になった精神的世界の建設に際して、独立して創造的要因として働く理想的全体、あるいはホリスティックな理想、または絶対的価値が出現する。そのようなものは真善美の理念であり、それらは宇宙における新しい秩序の基礎を用意する⁽¹¹⁾。

7 自由と全体、全体と部分の関係

次に、第6章「ホーリズムのいくつかの機能と範疇」において、スマッツはいかに自由の概念が有機体全体の概念に根差しているかを強調している。彼はいう。「自由の概念が有機体全体の概念に根ざしていることは明らかである。というのは、外的な因果律は、全体の微妙な新陳代謝によって全体それ自身の何かに吸収され、変えられる。他のものが自己自身になり、必然または外的決定は、自己決定または自由に変換される。そして、連続した全体が進むと、自由の要素は宇宙において増えていき、ついには人間の段階において

自由が自由自身を意識的にコントロールし、精神の自由な倫理的世界を創造し始めるまで自由の度合いをどんどん広げようとする。このようにしてホーリズムは、有機体の進歩と自由な創造的前進の中にある全宇宙の基盤になり、究極的に生命が持つ価値を与える『価値』と『理念』にとって基盤になる。そして有機体の進歩と同じように、あらゆる精神的な進歩の状態を示す『自由』の基盤となるのである。……必然は自由に変えられる。物理学の因果律の鎖は、新しい自由の象徴となる⁽¹²⁾。」

さらにスマッツは、全体と部分の関係について、「全体は全体を構成している部分以上のいくつかの中間物ではない。全体は部分の親密な結合とその結合から生じる新しい反応と機能におけるこれらの部分である。部分の独立した機能と活動は、それ自身がそうであるように構造の全体において組み合わせられ、関連づけられ、相互に関係づけられて統合されるのである⁽¹³⁾」と説明した上で、混合の公式とホリスティックな公式について次のように説明している。

「混合を表すためにXを用い、全体を表すためにX 1を用いるとすると、ある場合には $a+b+c+d=X$ であり、他の場合はX 1（全体）ということはいできない。しかし、X 1の中において生じる総合においては、部分自身の機能はa 1, b 1, c 1, d 1に変えられ、その結果、 $a+b+c+d=X$ という混合の公式に対応して、我々は $a 1+b 1+c 1+d 1=X 1$ というホリスティックな公式を取り入れる。この点を認識することが最も重要である。部分（細胞、器官など）の個々の機能と合成物における部分合成と相互関係は、全体である総合によって影響を受け、変えられる⁽¹⁴⁾。」

8 ホーリズムの機能

そして、同章の締めくくりとして、スマッツはホーリズムの機能について、次のように要約している。

- (A) 1. まず第一に、ホーリズムは創造的な動因であり、そのようなものとして有機体の構造とそれらの機能を作り上げたり、差異を生じさせたりするに際して現れる。これらは改造や変化や突然変異であるかもしれない。それらは、異なった種の起源を説明するような通常の特別な違いであるかもしれない。これらの違いは新しい器官と構造を含むかもしれない。あるいは単に全体としての有機体をもっと複雑にする現存している構造を一般的に複雑化することを含んでいるのかもしれない。
2. 勿論、この創造的なホーリズムは、有機体と同じように無機物においても進化の全過程の原因となっている。存在するものすべての重大な主たる類型は、原子、分子、細胞、有機体、植物の類型の大きなグループ、動物の類型の大きなグループ、そして最後に人間の類型のようなものは、ホーリズムによるものである。創造的なホーリズムは、このように科学のすべての大きな部門となっている。
- (B) 1. 第二に、前述した詳細な構造上、機能上の分化とは別に、ホーリズムは、ホーリズムが指導、管理、支配の度合いを及ぼす有機体における一般的な組織、統合、

規制作用の動因である。

2. この規制と制御は、一般的に有機体の構造と機能に及ぼされる。しかし、たびたび特別なホリスティックな器官が発達することがある。それは特に規制と制御を行うに際して助けるよう運命づけられているようである。そのような特別なホリスティックな器官は、規則正しく分泌液を一般的組織、神経組織、そして特に精神と相関関係がある頭に注ぎ込む内分泌腺である。これらや他のホリスティックな器官は、調整する働きにおいてホーリズムにとって特別な助けとなる。

- (C) 第三に、進化の異なった段階や類型と構造のさまざまな分化の次元において、ホーリズムのこれらの活動を表現し説明するために、全体の範疇またはホリスティックな範疇が必要である。このようにして物理的、化学的、有機的、精神的、そして人格の範疇が生まれる。それらはすべてさまざまな段階でのホリスティックな働きを表現しており、ホーリズムという言葉に還元することができる。このようにしてホーリズムは、すべての他のものが導き出される宇宙の根本的働きとしてこの計画の中に現れる。そしてホーリズムの概念は、同様にすべての他の範疇が導き出される記述と説明の究極的な範疇である。それ故ホーリズムは、実在のあらゆる種類の形態と分野を我々が一瞥するための究極的な見解からなっている。
- (D) 創造的なホーリズムにはもう一つの局面がある。……進化の最後の最も高い到達において、我々はホーリズムがあるゆる価値の根源であることを理解する。愛、美、善、真実、それらはすべて全体によるものである。全体はそれらの源泉である。そして全体においてだけ、それらは最終的に満足のいく説明を見い出す。ホーリズムは構造、形態そして有機体の世界における法則を規定するだけではない。それは精神の理想的世界の根拠そのものであり原理である。実際、ホーリズムがその場の最も明らかな具体性を見い出し、説明の究極的な範疇としての最も決定的な説明を見い出すのは、精神的価値の領域においてである。その進化の最後の最も高い到達においてよりも実りある創造性はどこにも見い出せない。創造的なホーリズムのこの局面にただ言及する以上に実践することは、まず早すぎるであろう。しかし全体の偉大な理念を形作るに際して、創造的活動の説明は大きな仕事すぎて、この入門的な作品において引き受けることはできない⁽¹⁵⁾。

9 ダーウィニズムとホーリズム

また、スマッツは第8章「ダーウィニズムとホーリズム」において、ダーウィニズムでは変異を抑制する面が無視されていると批判した上で、次のような興味深い比喻を紹介しながら、両者の違いについて説明している。「美というものは、ホリスティックな基礎に基づいていることは否定できない。美は本質的にはホーリズムの産物であり、ホーリズムと離れて説明することができない。美は全体に関するものであり、美は全体における部分との関係である。美は形と色、前景と背景、表現と暗示、構造と機能、構造と場の要素が混ざり合ったものである。……生命の王国において、神の都が生まれている。偉大な人間の発達とは別に、自然における美は、同じ物語を物語っている。……メスはオスとわかる

印を求め、他のオスに先立って一匹のオスを選び、そのオスに夢中になるのを促すサインを要求しているだけである。そして、返礼としてメスはメスの最も控え目な要求とは全く釣り合わない美の圧倒的な啓示を目にするのである。メスのキジは、オスのキジの素晴らしい色彩を識別する能力はない。それは人間の能力をさえはるかに超えたものである。しかし、ある計り知れない方法でメスの中にある感情的な本性の何かがオスの彩りを認知し納得するのである。それは深みへの計り知れない呼びかけであり、全体への完全な訴えである。明らかにダーウィンの要因が満足に説明することができる以上のことがすべてこのことの中に存在している。このことを率直に認めないのはばかげたことであり、非科学的なことであろう。ホーリズムは特別なダーウィンの要因と相互に影響し合う活動的要因であり、その目的のみならずその産物は生物の進化の直接的現在の有用性と必要性をはるかに越えており、その弓は遠くの地平線に向かって、あらゆる人間の展望と理解の力を越えて張られているということである⁽¹⁶⁾。」

スマッツがダーウィンからいかに大きな影響を受けたかは、「私は、世界のすぐれた書物の中でも、ダーウィンの素晴らしい本における結語ほど深く私に影響を与えた文章は少ないことを白状してよいでしょう。それらは簡単に飾らない言い回しとは裏腹に、説得力があり名文である」と記していることから明らかであるが、進化における内的要因と外的要因との間の相互作用はダーウィニズムよりももっと緊密で微妙なものであると彼は主張する。この点について彼は次のように説明している。

「内的創造的要因は、直接に外的要因の刺激によって直接的に働く。そして、ここで現れる変異はこの緊密な相互作用の結果である。ワインズマンによって特に強調された外的要因から内的要因を分離することは、観察と明らかに一致しているにもかかわらず、実際は進化における時の要因を無視することに基づいた間違った仮定である。……純粋に機械的なものと捉えるこの要因についての考え方は、詳細な部分においては大変な難点となり、全体として生物の進化の過程を理解することを不可能にさせてしまった。それ故に、私は、この内的要因とは反対の考え方を強調し、それは性格と働きにおいてホリスティックなものであり、機械論的な仮定がそれ自身の生み出した困難を解決し、進化において働いている二つの要因の調和に導くことを示す努力をしてきたのである。」

ちなみに、スマッツは第一章「基本的概念の再構築」では、「我々の考える物質という概念に決定的な革命を起こさせなければならない⁽¹⁷⁾」と述べ、第二章「再構築された空間と時間の概念」では、「物理学の分野での最近の進歩は、革新を無機の世界にまで広げてきた」「新しい『空間と時間』の概念によれば、一定の組織的構造は物理的宇宙の本質的特質となり、この構造上の特質が多くの説明不可能な現象を説き明かす⁽¹⁸⁾」と指摘している。

10 ホリスティック教育への新潮流

20世紀は西洋文明が日本文化の世界観に近づき始めた歴史的転換期であり、科学の原型とされた物理学の世界で機械論的世界観と要素還元主義の限界が明らかになり、物理学の最先端にあった量子力学がニュートン・デカルト的パラダイムに対してパラダイムシフト

を迫った。

まず、アインシュタインは光量子の概念が示す光の二重性（粒子と波という性質）の考えから、機械論的世界観の絶対視に疑問を投げかけた。そして、相対性理論によってニュートンの絶対時間と絶対空間の基本概念が崩壊し、近代科学のパラダイムを根底から覆した。ハイゼンベルクの不確定性原理によれば、量子の世界では時間を確定すると空間が確定できなくなり、逆に空間を確定すると時間が確定できなくなる。つまり、運動量と位置が同時に測定できないということは、近代科学が基盤とした機械論的世界観の絶対性を否定することを意味する。

物理学に始まったパラダイムシフトの波は生物学、心理学へと波及し、これらの学問領域を超えて、中世から近代への転換に匹敵するきわめて大きなポスト近代への指向をみせた。F・カプラは『新ターニングポイント』において、物理学のパラダイムシフトに端を発したこの根源的、人類的な大きな変革の潮流について次のように概観している。

「物理学の新しい概念はわれわれ物理学者の世界観に、デカルトやニュートンの機械論的概念から、ホリスティック（全包括的）でエコロジカル（生態学的）な視点へと、大きな変化をもたらしてきた」。

ここで示されている「ホリスティック」な世界観は＜つながり＞を重視するものであり、その意味で旧物理学の＜分断＞を乗り越える視点を提供している。また、カプラが示している現代物理学の新しい世界観とホリスティックな世界観には相通じるものがあり、これらの「対話」―比較、検証、相互作用―を試みることにより、分断の原理から引き起こされている現代の諸問題を解く鍵を獲得していく必要がある。

20世紀後半になると、アメリカで科学と科学技術に疑問を投げかける多様な市民運動が表面化し始め、現代文明の危機を日常的な生活の場を通して乗り越えていこうとする、ニューエイジ運動と呼ばれた実践的な思想運動が台頭し、日本では「ニューサイエンス」と呼ばれ、マスコミの話題となった。1970年代後半から1980年代にかけての「ニューサイエンス」が問いかけた最も大事な点は、①患者を心の状況や人間関係まで含めた全人的存在として捉える必要がある、②医者と患者の人間関係を回復することが重要である、等の問題提起であった。人間性心理学のマズローに受け継がれる新潮流の中で、アーサー・ケストラーの「ホロン」の概念⁽¹⁹⁾とエイリッヒ・ヤンツの「自己組織化する宇宙」⁽²⁰⁾論及びそれにトランスペアソナル心理学の視点を加えたケン・ウィルバーの名著『進歩の構造』が、後述するホリズムとの関係で特に注目される。

このニューサイエンスを背景として、肉体の疾患部に薬を投与し、外的手術によって病気を機械の故障と同じように治そうと考えた西洋医学の限界を打ち破ろうとするホリスティック医学の運動が1970年代後半から登場し、1980年代後半からホリスティック教育の新たな潮流へと発展していった。

ニューエイジ運動の中で、医者と患者の人間的な関係を回復することの重要性を強調したアメリカの医師、ハーバード・ベンソンは西洋医学を「壊れた機械である患者と、治す機械である医者が、診断や治療のための医療機械を介して向き合っている」と評したが、医学におけるこのような思想がホリスティック医学という考え方に受け継がれた。

1978年にアメリカ、1987年に日本に「ホリスティック医学協会」が設立されたが、これ

らは、人間の心と体を分離し、さらに肉体を細分化して、臓器、組織、細胞、蛋白質、遺伝子という要素に分解し、要素の異常だけに病気の原因を求める近代西洋医学に対する反省から生まれたといえる。

11 おわりに

21世紀に求められているのは、「機械論的パラダイム」から「生命論的パラダイム」への知のパラダイム転換であり、複雑系の知への知の成熟である。田坂公志によれば、現代の知には、その依って立つ機械論パラダイムから必然的な傾向として生じる①「知と知の分離」②「知と情の分離」③「知と行の分離」という三つの病があり、これらが現代の知の生命力を失わせている。

①は「専門主義」、②は「客観主義」、③は「分業主義」の病であり、これらの三つの分離の病を克服するための方法は「合一」の回復、すなわち知行合一、自他合一を回復する以外にない。クリシュナムルティは「あなたは世界であり、世界はあなたである。あなたが癒されるとき、世界も癒される」と語ったが、自分自身をいかに深く見つめながら、自己を語ることによって、知を語るができるのか。そのことこそが問われている。そこで、田坂公志は次のように指摘しているが、その通りであろう⁽²¹⁾。

「自己を語ることによって、世界を語るという知のスタイルを創造していかなければならない……21世紀において知を語るとき、最も鋭く問われているものがある。それは、いかなる知を語るかではない。それは、いかなる人が語るかということである。」

ここにこそ「主体変容」というホリスティック教育の原点があるのではないか。

(注

(1) Smuts, J. C., Holism and Evolution, The Gestalt Journal Press, Inc, 1996.

(2) 吉田敦彦『ホリスティック教育論』日本評論社, 1999年, 238頁

(3) Smuts, J. C., Holism and Evolution, The Gestalt Journal Press, Inc, 1996.

(4) ibid.

(5) ibid., pp. 9-11.

(6) ibid., pp. 22-23

(7) ibid., p. 35

(8) ibid., p. 36

(9) ibid., p. 101

(10) ibid., pp. 108-109

(11) ibid., pp. 106-107

(12) ibid., pp. 119-120

(13) ibid., pp. 122-123

(14) ibid., p. 123

(15) ibid., pp. 143-144

(16) ibid., p. 184

(17) ibid., p. 1

(18) ibid. p. 23

(19) ホロンとは、ギリシャ語のholos（全体）とon（部分の意の接尾語）の合成語で、全体一

部分の共生・相互依存関係を意味する。つまり、全体としての独立性と部分としての従属性を合わせもつ実在の造語がホロンである。有機体がさまざまな器官系、器官、組織、分子、原子から成る階層構造をなしながら、それぞれの構成単位が特有の活動とリズムとパターンをもって協働しているように、実在するものは皆、全体は部分に依存し、部分は全体に従って相互依存するシステム（ホロン）の中で、極大と極小に向かって「両端の開いた壮大なホロンのマルチレベルのヒエラルキー（多重の階層構造）」をなしている、とケストラーは説明している。

- (20) エイリッヒ・ヤンツ，芹沢・内田訳『自己組織化する宇宙』工作舎，1986年，参照
- (21) 田坂広志『複雑系の知』講談社，1997年，195-204頁